

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

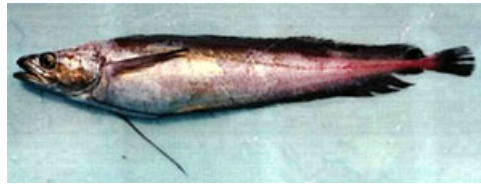
[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 イトヒキダラ

学名 *Laemonema longipes*

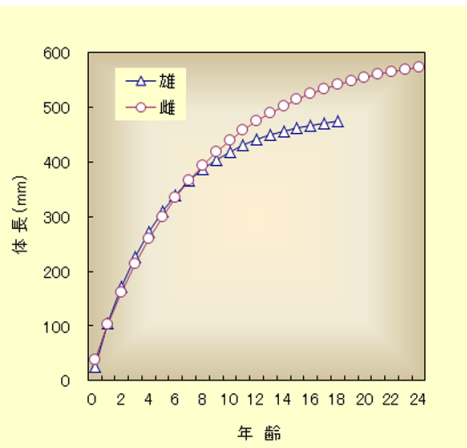
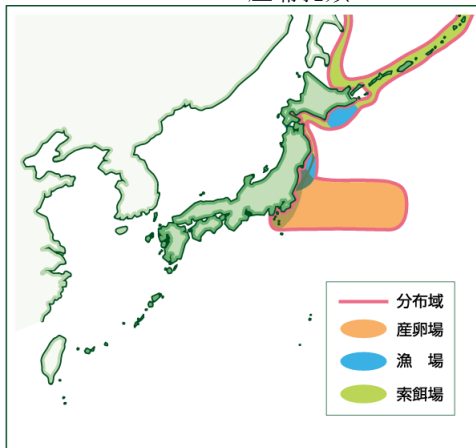
系群名 太平洋系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄18歳、雌24歳程度
成熟開始年齢: 雄5歳、雌7歳以上
産卵期・産卵場: 2～4月、本州関東・東北南部沿岸～本州東方の外洋域
索餌期・索餌場: 周年、本州関東沿岸以北の陸棚斜面域(水深300～1,500m)
食性: オキアミ類やカイアシ類などの甲殻類およびハダカイワシ科魚類など
捕食者: ムネダラなどの大型ソコダラ類やオットセイ、マッコウクジラなどの海産哺乳類

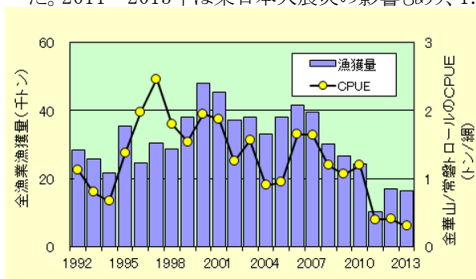


漁業の特徴

主に沖合底びき網漁業によって漁獲されており、1990年代以降に本格的に漁獲されるようになった。スケトウダラの代替で練り製品の原料として利用されており、漁獲圧はスケトウダラやその他魚類の漁獲状況によって変化する。また、ロシアに対し日本水域内における漁獲量が割り当てられており、2000年以降のロシア船の漁獲量は日本船よりも多い。

漁獲の動向

日ロ両国の漁船による漁獲量は1992～1999年には2.2～3.8万トンで推移し、2000年には4.8万トンと過去最高を記録した。その後2008年までは3万トン以上漁獲されていたが、2009年には2.7万トン、2010年には2.4万トンに減少した。2011～2013年は東日本大震災の影響もあり、1.0万～1.7万トンになっている。

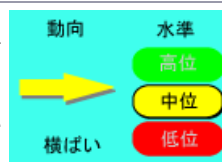


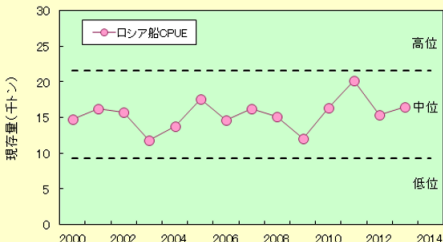
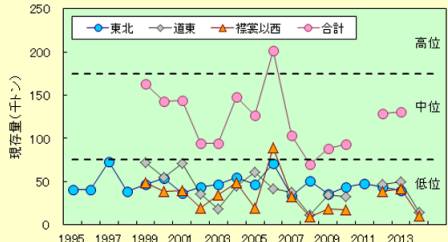
資源評価法

資源の水準と動向は、沖底とロシア船のCPUE並びにトロール調査による現存量推定値から判断した。トロール調査は東北および北海道の太平洋側の陸棚斜面域において、主な分布水深帯である水深350～900mで実施し、面積密度法により現存量を算出した。イトヒキダラは海底から20～50mlほど離れた水域にも分布することから、着底トロール調査で得られた現存量は、資源量の相対的な指標値として用いた。

資源状態

東北海域と北海道太平洋岸におけるトロール調査結果によると、1999～2010年の現存量は7.0万～20.2万トンで推移していた。2008年の現存量が最も少なく、2010年には9.3万トンとなり、やや増加していた。震災以降の沖底は漁獲量が極めて少なかったことから、2013年の現存量およびロシア船のCPUEから資源水準を判断した。その結果、資源水準は中位であった。また、最近5年間(2009～2013年)の現存量およびロシア船のCPUEは共に微増であること、2014年の北海道海域で現存量が少なかったことから、動向は横ばいと判断した。





管理方策

資源は複数年に一度発生する加入により支えられている。成長が遅く成魚になるまで年数が掛かるため、親魚を取り残すことを管理目標とした。トロール調査で求めた資源量指標値と漁獲量をもとに、基本規則2-1)に基づいてABCを算出した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	27千トン	$0.9 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.11$	—	—
ABCtarget	22千トン	$0.8 \cdot 0.9 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.11$	—	—

- 平成26年度ABC算定規則により、ABCは $\text{ABClimit} = \delta_1 \cdot \text{Ct} \cdot \gamma_1$ 、 $\text{ABCtarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ で計算し、 k は係数(標準値の1.0)、 b は資源量指標値の傾き、 I は平均値(直近3年間)である
- ABCは百の位を四捨五入した値
- Cave3-yr は2008-2010年の平均

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は横ばい
- イトヒキダラの漁獲は、スケウダラの漁獲状況や沖底の対象となる他の魚種の漁獲状況などにも影響を受けやすい

管理方策のまとめ

- 成長が遅く、成魚になるまで年数が掛かることから、親魚を取り残すことが重要である

執筆者: 成松庸二・伊藤正木・服部 努・柴田泰宙

資源評価は毎年更新されます。